

父親が青年期の娘の進路選択に与える影響に関する 日中比較研究

曹 晶
(発達教育学研究科)

表 真 美
(教育学科)

本研究の目的は、女子大学生の親子関係や職業に対する意識についての日中比較、また、父親が大学生の娘の進路選択と職業意識に与える影響を明らかにし、中国と日本の違いを考察することである。日本の女子大学生285人、中国の女子大学生137人を対象に質問紙調査を実施した。その結果、現在の父子関係・母子関係の平均値は日本の方が全体的に高く関係が良く、両国とも父子関係よりも母子関係の方が良好である、日本よりも中国の父親が進路の相談にのる頻度が高い、職業志向意識に最も影響を与えていたのは、両国とも母子関係であったが、中国は日本よりも父親の影響が大きいことが明らかとなった。

キーワード：父親，娘，父子関係，進路選択，職業意識，

1. 研究の背景と目的

日本では、1970年代半ば以降、「少子化現象」が続いている（内閣府2004）。地域のつながりの希薄化を背景とした保護者の孤立が深まっている。共同の営みである子育ての前提が崩れ、家族が閉じた状態におかれているといえる。現在は共働き世帯数が年々増加し、母親に限らず、父親も親としての役割が高まっている（吉岡亜希子2019）。また、女性のライフコースが多様化、非婚化や晩婚化が進み、女性の職業観は変化している。

父親の子育てに関する研究では、父親が子供と遊ぶこと、父親の子育て、父親との関わりが子供の情緒性、社会性、自発性、独立意識、友人ネットワークの広さと関連するとされる（石井，2009）。日本の研究では主に父親の「関与」に関するものが多く、この概念は通常「子どもの世話」や「一緒に遊ぶ」頻度で計られている場合が多い（谷2019）。

中国では、第7回国勢調査の公表データによると、世帯人員は2.62人となった（中国第七次全国人口普查）。深刻な少子化に伴い、2021年の5月に「三人っ子政策」を発表している。

一方、1949年の建国後、経済を発展させるため、女性の労働力が重視されるようになった。政府は女性の社会進出を推進するために、女性の就労についての法律の整備も行った（田2017）。

中国の父親の育児に関する研究は、心理学の視点から父親の育児参加が子どもの心理発達にどう影響するのかを分析したものや、教育学の立場から乳幼児教育の中における父親の重要性を考察したものが見られる。しかし、父親の子育てに焦点を当てた分析は少ない。これらの研究は、主に父親育児参加についての重要性を強調している（徐ほか2009）が、父親の育児休暇に関する規定が未だ整っていない。

中国が設立されてから、男女問わず平等に働くことが基本であった。そのため、男女平等に働く社会で育った女性は結婚、出産後、経済的な理由だけではなく自己実現のために就業を望むなど、総じて働く意欲が高い（松下ほか2015）。

中国と日本は、共に儒教思想にもとづく家父長制を歴史にもつ、少子化が進んでいるといった共通点はあるものの、母親の就労や父親の育児に関しては状況に違いが見られる。

そこで、本研究の目的は、女子大学生の親子関係や職業に対する意識についての日中比較した上で、子どもの頃と現在の父娘関係、父親の娘に接する態度、性別役割分業観などが、大学生の娘の進路選択と職業意識に与える影響を、母親との比較において明らかにし、中国と日本の違いを考察することである。

2. 先行研究

(1) 青年期の自立

青年期は、それまで積み上げてきたさまざまな枠を問い直し、一人の人間として自己を確立する時期であり(宮本ほか 2010)、親からの「精神的自立」が重要なテーマの1つとなる。青年期後期にあたる大学生は、家族と接する時間が少なくなるにつれて親との距離を保つようになり、心理的・社会的に自立していく時期と言える。男性は女性よりも早い時期から家族よりも外の世界に目を向け、依存していた親から離れようとする傾向がある(伊藤 2005)とするならば、青年期後期の女性の親子関係と女性の精神的自立に着目することも重要である。

例えば、岩永・藤原(2010)の青年期後期の女子を対象にした調査では、娘が父親に存在を尊重されていることや、情緒的支持を感じられるような父娘関係などが「精神的自立」の高さと関係していると指摘した。さらに桜庭ら(2007)は、父親への心理的依存から離脱し、母親と対立していないことが精神的自立を高めるとした。インタビュー調査で得られたカテゴリーを概観すると、娘が父親を再評価することが精神的自立と深くかかわっていると考えられる。父親を社会人の先輩として尊敬したり、父親から就職についてアドバイスをもらったりすることを通して、娘は社会に目が向くようになり、親からの精神的自立が促進されるといえる(野口ほか 2018)。また、女性では親子関係が青年期以降もアイデンティティ発達などに影響を及ぼすとされており(北村ほか 2001)、特に父親の養育態度の影響が大きく、父親からの安定した関心が、他者との安定した絆の基盤につながることを示唆されている(田村ほか

2005)。このことから、青年期における父親から娘へのかかわりは、娘の生涯にわたる影響をもたらす可能性があると考えられる。

(2) 青年期の進路選択

青年期における重要な課題の一つとして進路選択がある。西山(2000)は、進路選択とは、「社会的な自己実現やそれを通しての経済的自立への道筋を実現していく選択行動」と定義しており、青年は進路を選択、決定する過程の中で、自分が社会の中でどのように自己実現、経済的自立をしていくかという課題に取り組む。進路選択は、経済的自立だけではなく、一人の社会人としての精神的な自立という側面もあり、ここでは進路選択を「社会の中で自己実現、経済および精神的な自立を実現するために進路を選択、決定していくプロセス」として用いる。

(3) 父親が大学生の娘に与える影響

鹿内(2013)は、大学生を対象とし、希望進路、希望するに至った過程、仕事に対する構えに影響を及ぼした要因、親との関係を尋ねる面接調査を行い、父親は女子大学生の職業意識に大きな影響を与えていると指摘している。家庭生活において父親は社会人としての顔を見せる場面が比較的多く、将来の進路を考えるうえで、大学生は父親を社会人としてのモデルとしてとらえることもある。

小野寺(1984)は、特に社会生活について語る父親との接触の多少が重要な要因であり、自分の仕事のことや社会情勢などについて話してくれる父親との関わりの方が、ただ単に親として行動をとる父親との関わりよりも現在女子大学生である娘からみてより魅力的であり、評価が高くなると述べている。

(4) 中国における父親と子供の進路選択

周(2020)の研究による、子どもは父親と同じ性質の職業を選ぶ確率が高く、母親の職業の性質は子どもの職業選択に大きな影響を及ぼさない。親は個人職業選択の基礎となる主要な社会的文脈であり、この社会的文脈は職業選択に

大きく2つの影響を与える。1つは間接的、つまり家庭環境が職業選択という人間特性の形成に経時的に影響を与えるということである。もう一つは、直接的な影響である。伝統的な社会から現代に至るまで、子供は父親のキャリアを受け継ぐという考え方は高く評価されている。親は子供に自分と同じ職業を選んでほしいと願うことが多いので、子供の職業選択に関しては、親の希望も非常に重要な参考要素になる。現在の厳しい雇用情勢では、卒業後に失業するケースも多く、卒業してもなかなか自分に合った仕事に就けないという人も少なくない。中国の多くの親たちは、組織との関係を利用して、子どもの雇用問題を解決することになるので、親が子どもと同じ組織にいる確率が高くなる。子どもの進路選択については、両親ともに影響力を持つが、父親が母親よりも大きな影響力を持つ。これは、中国の家父長制社会の伝統的なイデオロギーと強く関連している。現代社会では、男女の権力はある程度平等になっている。しかし、父親が子どもの教育に対して絶対的な権力を持ち、あるいは家庭の主要な問題に対して影響力や決定力を持ち、子どもが職業観の形成や職業選択に重要な役割を果たしていることに変わらない。子どもの職業観の形成、あるいは職業選択において、父親は重要な役割を担っている。

3. 研究方法

(1) 調査方法

本研究は2022年6月～9月に、K女子大学の285人、中国N大学の女子大学生137人を対象者として質問紙調査を実施した。質問の内容は、基本情報、子どものころ、現在の親子関係、仕事についての会話、大学進学についての相談、大学卒業後の進路についてのアドバイス、性別役割分業観、卒業後の進路、職業志向傾向などである。分析には、IBMSPPSS 社会統計ソフト、KH コーダーを用いた。

(2) 分析方法

まず、単純集計を行い、父子関係・母子関係、中国と日本の状況を比較した。

重回帰分析は、独立変数として、父親に関する変数「子どもの頃の父子関係：勉強に関する項目（以下「勉強（父）」）」「子どもの頃の父子関係：触れ合いに関する項目（以下「勉強（父）」）」「現在の父子関係」「大学卒業後の進路へアドバイス（父）」「仕事についての話（父）」「父親の職業」「父親の職業満足度」「父親の性別役割分業観」、また、母親に関する変数「子どもの頃の母子関係：勉強に関する項目（以下「勉強（母）」）」「子どもの頃の母子関係：触れ合いに関する項目（以下「触れ合い（母）」）」「現在の母子関係」「仕事についての話（母）」「母親のライフコース」の13変数を用いた。従属変数としては、「卒業後の希望進路」「卒業後に就きたい職業が決まるかどうか」「職業意識」の3変数を用いた。

4. 研究結果及び考察

(1) 調査対象者と属性

日本では、調査対象者の36.1%が一回生、59.6%が二回生、4.2%が三回生だった。そして、国文学科41人、英文学科17人、史学科38人、教育学科131人、養護福祉教育学科9人、音楽教育学科5人、児童学科1人、心理学科2人、生活造形学科3人、社会学科9人、法学科27人を対象とした。父親と母親の平均年齢はそれぞれ、51歳、49歳であった。

中国では、調査対象者の10.5%が一回生、29%が二回生、12.3%が三回生、27.2%が四回生、5.6%が大学院生だった。父親と母親の平均年齢はそれぞれ、50歳、48歳であった。

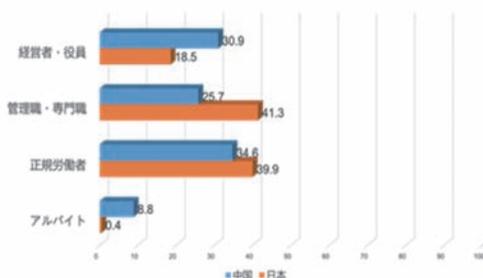


図1 父親の職業

父親の職業は、中国では「正規労働者」、次いで「経営者・役員」であった。日本では「管

理職・専門職」に次いで「正規労働者」であった(図1)。

母親のライフコースを日中で比較すると、中国は仕事の継続、日本は再就職が多くなった(図2)。

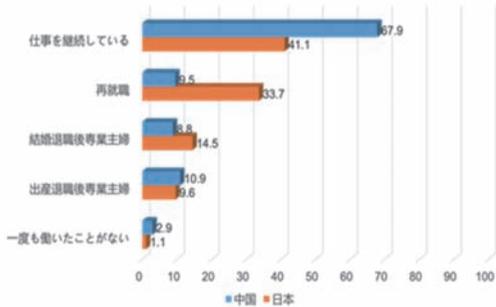


図2 母親のライフコース

(2) 親子関係、職業意識の日中比較

1) 子どもの頃の父子関係と母子関係

子どもの頃の父子関係と母子関係については、6項目について5件法で問うた。子どもの頃の父子関係に関する質問の結果は、「宿題を教えてくれた」以外はすべて日中に有意差が認められた(図3)。前半の「勉強」に関わる3

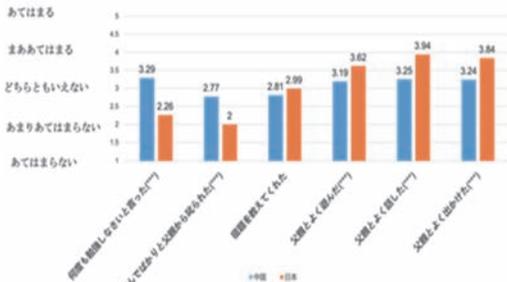


図3 子どもの頃の父子関係

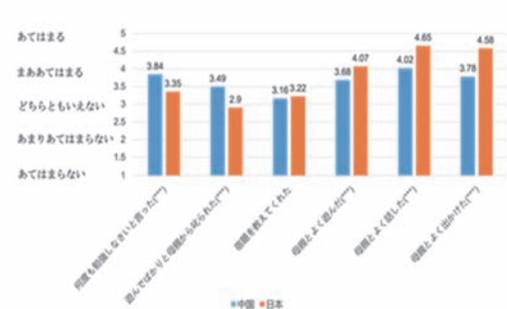


図4 子どもの頃の母子関係

項目は中国の方が高く、後半3項目の「触れ合い」は日本の方が高い。中国の父親は教育熱心と考えられる。

子どもの頃の母子関係も父子関係と同様の結果だったが、父子関係よりも母子関係の方が全体的に頻度の高い傾向にあった(図4)。

2) 現在の父子関係と母子関係

現在の父子関係について、「父親は自分のすることを応援してくれる」、「父親は自分のよいところを認めてくれる」、「父親は自分がしたいことを自由にやらせてくれる」、「父親を信頼している」、「父親は経済的に自分の家を支えてくれたと思う」は中国よりも日本の平均が高く有意差が見られた(図5)。

現在の母子関係については、すべての項目において日本の平均値が高くなり、有意差が見られた。日本における父親と母親を比較すると、「経済的に自分の家を支えてくれたと思う」の項目で、父親は4.65、母親は4.31であったが、そのほかは母親の平均値が高くなった(図6)。

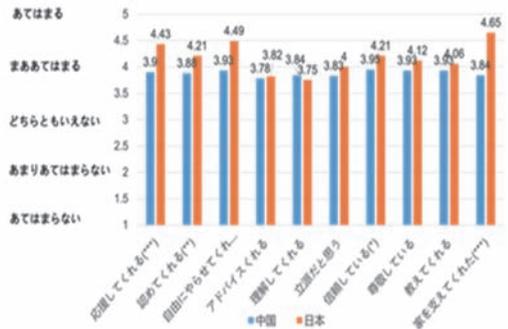


図5 現在の父子関係

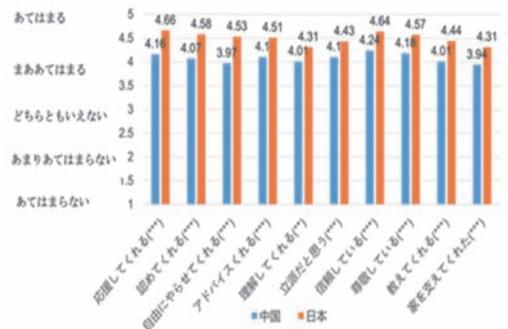


図6 現在の母子関係

3) 大学進学について最もよく相談にのってくれた人は誰か

日本の上位は、母、高校の先生、塾や予備校の先生の順であり、各々 53.3%、17.9%、8.1%であった。父親は第4位、7.7%であった。中国の上位は、母、学校の友達、父の順であり、各々 26.3%、17.9%、8.1%であった。

日本の女子大学生は、はるかに多くの学生が父親より母親を選んでおり、中国では父親を選んだ人の割合が日本より多かった。

4) 大学卒業後の進路について最もよく相談にのってくれた人は誰か

日本の上位は、母、父、その他であり、各々 44.6%、11.6%、13%であった。中国の上位は、父、母（同じ割合）、大学の先生であり、各々 24.8%、24.8%、13.9%であった。中国では娘の職業選択について父親の影響が大きいことが考えられる。

5) 父親は、大学進学、大学卒業後の進路について、どの程度アドバイスをくれるか

父親の大学進学の相談、大学卒業後の進路についてのアドバイスについては、いずれも中国の頻度が有意に高い結果となった（図7）。

6) 父親、母親と仕事について話をするか

中国の両親は、日本と比較して娘と自分の仕

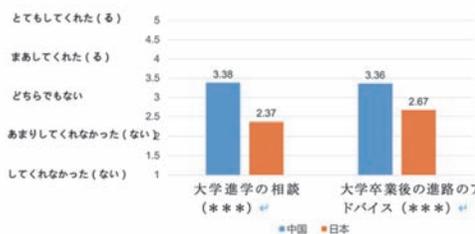


図7 大学進学、大学卒業後の進路についての相談

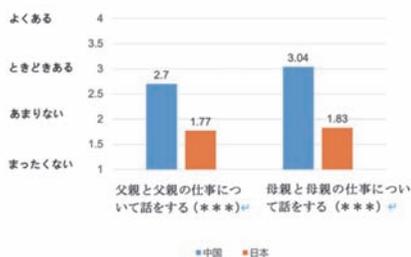


図8 仕事についての会話

事に関する話題を子供によく話しており、父親より、母親と母親の仕事について話をする人が多かった（図8）。

7) 性別役割分業観

「男性は仕事、女性は家庭」に対して、「反対」「どちらといえば反対」「わからない」「どちらといえば賛成」「賛成」の5選択肢を設けた。娘の認識による父親の性別役割分業観だが、日本と中国の父親の性別役割分業観の有意差が見られなかった。日本の学生は、「反対」を選んだ人が中国より多かった。女子学生は父親よりも性別役割分業への「反対」が多かった（図9）。

8) 卒業後の希望進路

中国では、進学を選んだ人は 50.4% を占め、日本の対象者たちは、就職を選んだ人は多く、83.2% を占めた（図10）。中国は大学院進学により、より良い仕事を得られる可能性がある。中国と日本では大きな違いが生じた。

9) 就きたい職業が決まっているか

就きたい職業が決まっている割合は、中国よりも日本の方が高くなった。中国の女子大学生は進学を目指す割合が高いことが影響していると考えられる（図11）。

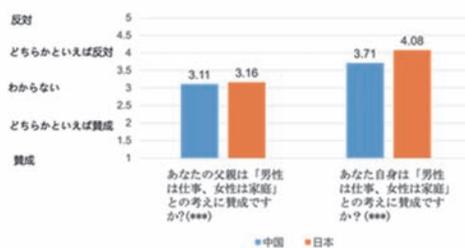


図9 性別役割分業観

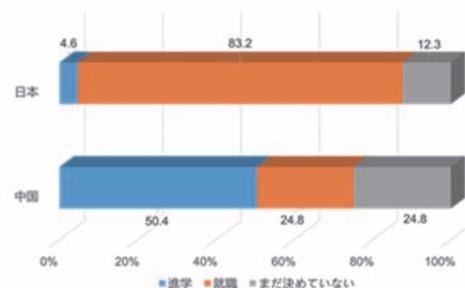


図10 卒業後の希望進路

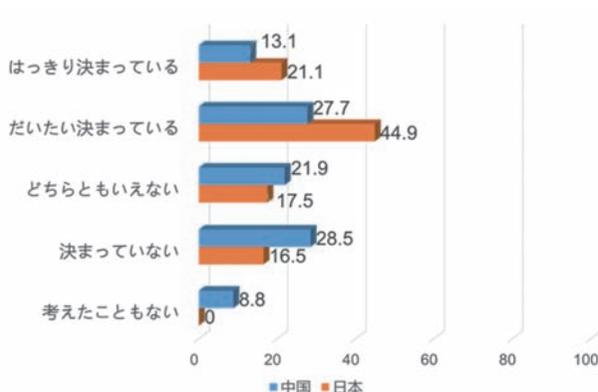


図 11 就きたい職業が決まっているか

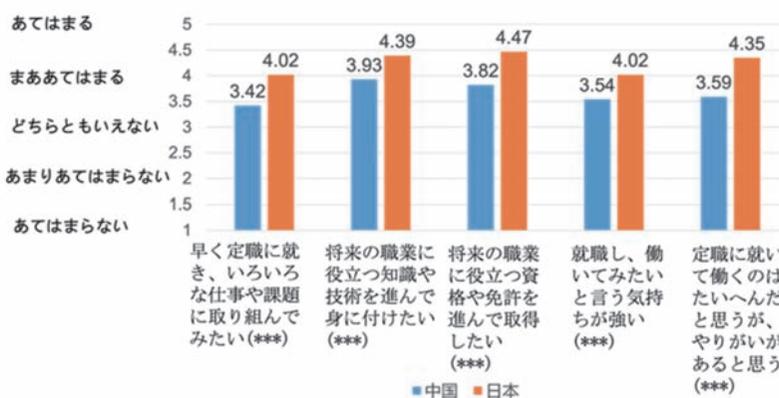


図 12 職業意識

10) 職業意識

職業意識について、「早く定職に就き、いろいろな仕事や課題に取り組んでみたい」「将来の職業に役立つ知識や技術を進んで身に付けたい」「将来の職業に役立つ資格や免許を進んで取得したい」「就職し、働いてみたいと言う気持ち強い」「定職について働くのはたいへんだと思うが、やりがいがあると思う」の5つの質問に対し5件法で回答を求めた(図12)。

中国と比較すると、すべての項目において日本の平均値が高くなり、有意差が見られた。中国は進学希望が多い一方、日本では就きたい職業が決まっている学生が多いことによると考えられる。

(3) 父子・母子関係、父子・母子のかかわりが進路選択に与える影響

父子・母子関係、父子・母子のかかわりが進路選択に与える影響について明らかにするために、先述の13項目を独立変数に「職業意識」「卒業後の希望進路」「就きたい職業が決まっているか」を従属変数に用いて重回帰分析を行った。中国と日本の結果を以下に述べる。

1) 中国の結果

職業意識、就きたい職業がきまっているかの2変数について有効な回帰式が得られた。母子関係が最も職業意識に影響を及ぼし、次いで父親の性別役割分業観であった。母子関係が良好なこと、父親の性別役割分業観が伝統的でないことが、良好な職業志向意識に結び付いていた。

表 1 一元分置分散分析の結果 (中国)

変数	職業意識	就きたい職業が決まっているか
	標準化係数	
勉強 (父)	0.063	-0.115
触れ合い (父)	0.036	-0.04
父子関係	0.151	0.164
大学卒業後の進路ヘア ドバイス	0.053	0.036
仕事についての話 (父)	-0.031	0.285*
父親の職業	0.136	-0.093
父親の職業満足度	0.003	0.108
父親の性別役割分業観	-0.302***	0.215*
勉強 (母)	0.027	-0.073
触れ合い (母)	0.095	-0.054
母子関係	0.498***	-0.007
仕事についての話 (母)	0.043	-0.042
母親のライフコース	-0.004	0.036
R2乗	0.528	0.182
調整済みR2乗	0.476	0.092
F値	10.156	2.017
N	132	132

表 2 重回帰分析の結果 (日本)

変数	職業意識	就きたい職業が決まっているか
	標準化係数	
勉強 (父)	0.186**	-0.15
触れ合い (父)	-0.007	-0.159
父子関係	0.099	0.071
大学卒業後の進路ヘア ドバイス	-0.076	-0.052
仕事についての話 (父)	0.092	0.131
父親の職業	-0.072	0.04
父親の職業満足度	-0.004	-0.019
父親の性別役割分業観	-0.112	0.082
勉強 (母)	-0.084	-0.062
触れ合い (母)	-0.013	0.242**
母子関係	0.415***	-0.22*
仕事についての話 (母)	0.032	-0.137*
母親のライフコース	0.099	-0.009
R2乗	0.256	0.117
調整済みR2乗	0.212	0.065
F値	5.784	2.231
N	232	232

また、父親と父親の仕事についての話をすること、次いで父親の性別分業観が伝統的な方が、就きたい職業が決まっている傾向にあった。

中国の先行研究 (周 2020) では、伝統的イデオロギーとの関連により母親よりも父親の方が影響力を持つとのことであったが、母親との関係が良いこと、父親の伝統にとらわれない意識が職業志向意識に影響していた。また、先行研究で中国では父親の職業が子供に影響するとの見解があったので調査項目に加えたが、父親の職業との関連はなかった。対象者は大学に進学している比較的裕福な家庭にいる学生と考えられ、経済発展とともにグローバル化により、中国の家庭も民主的な考え方にシフトしつつあることがうかがわれる。

逆に就きたい職業が決まっていることには父親の伝統的な考え方が影響していた。前述のように、中国の女子学生は半数以上が進学を希望しており、日本と比べると就きたい職業が決まっている人が少なかった。進学により、就職のための競争力を向上させることを目指していると考えられる。つきたい職業が決まっている人は、先行研究が示すように父親の影響を受けているものと推察される。

2) 日本の結果

日本も中国と同様に職業意識、就きたい職業が決まっているかに有効な回帰式が得られた。職業意識に影響を及ぼしているのは母子関係、次いで小さいころに父親が勉強に熱心だったこ

とであった。また、就きたい職業には小さい頃の母親のとのふれあい、母子関係が良くない方が、また、母親と母親の仕事について話をしない方が就きたい職業が決まっているという結果となった。

職業志向意識に母子関係が最も影響する結果は中国と日本、同様であった。母子関係は日本の平均値の方が高かったものの、中国も父親の値と比較すると、母親の方が高かった。父親の影響よりも、良好な母子関係が職業志向意識を醸成していることがうかがえる。中国だけでなく、日本でも働いている母親が多く、母親が子どもと社会を繋ぐ役割を十分に担うことができるためと考えられる。また、就きたい職業が決まっているかについては、子どもの頃は良好だったものの、現在は母親がマイナスの効果をもたらしている。就きたい職業が決まっている対象者は母親からの独立を願っているとも考えられるが、さらなる分析が必要である。

(4) 自由記述の分析

質問紙調査では、「仕事をする上でモデルになる人は誰ですか」、また、「進路選択に関して、父親から何か影響を受けたことがありますか」との質問を設け、自由記述を求めた。以下、中国と日本の結果に分けて述べる。

1) 中国

中国において、「仕事をする上でのモデル」についての回答は 27 人であった。上位は母、父、

先生の順で、各々7人、6人、3人であった。

また、「進路選択に関して父親から影響を受けたこと」については、39人から回答が寄せられた。「父親」というキーワードで回答を抽出した。

父親から進学、就職のアドバイスを受れたり、仕事の経験をもらったりしたことが述べられていた。例えば、「父は彼の会社を紹介した。就業の経験と経歴を教えてもらいました」「進学する大学を迷った時の決め手をくれたのが父でした」「大学院進学のアドバイスと自信をくれました」などであった。

また、父親から多くの応援と励ましを受けたというような回答も多かった。例えば、「自分が好きなことをやるという点は、母より父の方から教えてもらった」「やりたいことをやれと父に言われた」「父親はいつも私のことを応援していて、好きなことをすれば良いと言って、経済的支援などもある」。

そして、父親を仕事のモデルとして目指している人もいった。「父親と同じ人になりたいです」とか、「私は父親が電力会社で働くからエネルギーについて仕事をしたいです」などの回答があった。

しかし、父親の過度な支配が娘に反抗心を与えている回答もあった。例えば、「父は私が彼の意思で歩いていけることを望んでいる。私はとても嫌いだ」「父は私がやりたいことを応援そうに見えますが、実際に諦めさせたいです。うるさいと思った」というような回答であった。

2) 日本

日本において、「仕事をする上でのモデル」に回答を寄せた人は91人であった。その中で、一番多いのは「先生」で27人であった。「両親」と書いた人は4人、「母親」23人、「父親」8人であった。

また、「父親から影響を受けたこと」については、117人が回答した。その中で、父親が教師であり、将来父親と同じ職業に就きたいという回答が最も多かった。これは対象者に教育学専攻の人が多かったことと関係があると考えられる。例えば、「父と同じ仕事をしたいと思う

ほど影響を受けました」「父の職業が大学教師なので、自然と自分も教職を目指している」「父が教員なので、その姿を見て教員に憧れている」「父親が教師で、教師になることをとても薦められる」「父親が教員をしており、先生という立場は父親と同じ職業の人たちのため興味があり観察していた。そしてその影響を受け教員を目指すようになった」などの回答があった。先行研究では、将来の進路を考えるうえで、大学生は父親を社会人としてのモデルとしてとらえることもあるとの見解が述べられている（鹿内2013）。先行研究と同様の結果が見られた。

しかし、父親と同じような仕事をしたくないとの記述もあった。例えば、「父が自営業で苦しんでいるので自分は自営業はしたくないと思った」「父は残業や休日出勤が多いので、私は休みが取れる職に就きたいと思いました」「私が小さい頃、父は早朝出勤、深夜帰宅で、すれ違い生活をしていたため、そうならないような就職先を考えている。」などである。

また、父親から進学、就職のアドバイスを受れたり、仕事の経験をもらったといった回答もあった。例えば、「父が社会や大学のことをたくさん教えてくれたので、それを参考に考えています」「父親が相談にのってくれて進路を決めた」「私の父は高校教師のため、大学の話をたくさん聞かされました」「一歩踏み出す勇気が大切だと教わった」などであった。

そして、父親の仕事に取り組む姿を見て、父親を仕事のモデルにして、モチベーションを上げた人もいった。「父の仕事をしている姿に憧れて今の将来の夢を目指すことにした」「小さい頃から父親の仕事を手伝っている中で、父と同じように頑張っている人を支える仕事がしたいと考えるようになった」という回答だった。

3) 日本と中国の比較

日本において「母親」を仕事のモデルにする人が「父親」より多く、中国はほぼ同じであった。

父親の影響についての自由記述に記入したほとんどの人は、父親から良い影響を受けたと述べている。父親から進学、就職のアドバイスや、将来の職業選択への影響を受けていた。先行研

究では、中国の親は子供に自分と同じ職業を選んでほしいと願うことが多いので、子供の職業選択に関しては、親の希望も非常に重要な要素になる、と述べている（周 2020）。自由記述には、父親と同じ職業にしたいとした娘は少なかつた。日本も中国と類似する状況であることが明らかとなった。

一方、日本の対象者たちは、中国の回答で見られた「父親は嫌だ」「うるさいと思った」のような父に反発する回答が見られなかつた。前述の子どもの頃の父子関係の結果から、中国の父親が教育熱心であることが考えられ、その影響が回答に表れていることが推察される。

5. まとめと今後の課題

女子大学生の親子関係や職業に対する意識についての日中比較、また、父親が大学生の娘の進路選択と職業志向意識に与える影響を明らかにするために、日本の女子大学生 285 人、中国の女子大学生 137 人を対象に質問紙調査を実施した。その結果、以下 7 点の知見が得られた。

- 1) 子どもの頃の親子関係は、中国は両親が勉強を促したり教える頻度が高く、日本は遊んだり話したり出かけたりする頻度が高かつた。両国とも父親よりも母親の頻度が高かつた。
- 2) 現在の父子関係・母子関係は、平均値は日本の方が全体的に高くなり関係がよく、両国とも父子関係よりも母子関係の方が良好であつた。
- 3) 大学進学 of 相談、卒業後の進路の相談は、両国とも「母」が上位に上がったが、日本では父親との開きが大きいのに対して、中国では卒業後の進路の相談は父親が母親と同率であつた。
- 4) 父親が進路の相談にのる頻度を尋ねた質問では、日本よりも中国の方が高かつた。
- 5) 卒業後の進路は日本の 8 割以上が就職すると回答したのに対し、中国は半数以上が進学すると答えた。中国は就きたい職業が決まっていない対象者も多く、職業志向意識は総じて日本の方が高かつた。
- 6) 職業志向意識に最も影響を与えていたのは、両国とも母子関係であつた。就きたい職業が決まっていることは、中国は父親の影響、日本は母親の影響を受けていた。
- 7) 仕事をする上でのモデルは、中国では「母」「父」「先生」、日本では「先生」「母」「父」の順であつた。「進路選択に関して父親から影響を受けたこと」に関する自由記述では、中国は 39 人、日本は 117 人が回答した。両国とも父からの影響を肯定的にとらえる記述が多かつたが、中国では父親に反発する記述も見られた。

調査の結果では、両国とも最も進路の相談にのってくれた人は母親が上位であり、親子関係も父親より良い傾向にあつた。女性も働くことが当然の中国だけでなく、日本の対象者の母親も 7 割以上が働いていた。特に日本では、複数の対象者が自由記述の中で父親からの影響について述べたことは看過できないものの、両国とも父親と同様、母親が社会とのつながりをもっており、父親よりも母親の影響が強く結果に反映されたと考えられる。

その中で、中国は父親との相談の頻度が日本より高く、職業意識や就きたい職業が決まっているかにも父親の影響が見られた。母親の影響が強いことは両国共通であるが、中国の先行研究にあるように、家庭の中での父親の権威と言われるような状況も残っているものと考えられる。それに比較して、日本、特に現在大学生である年代の対象者は、仕事の関係による「父親不在」で母親とのつながりが深いと考えられる。

今後は母親の影響をコントロールした上で、父親のどのような態度が娘の進路選択に良好な影響を及ぼすのか、詳細な分析を試みたい。

文献

- 内閣府, (2004) 少子社会の到来とその影響
 吉岡亜希子, (2019) 父親の子育てネットワーク活動の成立条件と類型化—家庭教育を支える学習組織としての役割に注目して—, 北海道文教大学論集 20 号, 41-54
 石井クンツ, (2009) 父親の役割と子育て参加—その現状と規定要因、家族への影響について, 家計経済研究 (81) 16 - 23

- 谷艳芳, (2019) 关于父亲参与育儿的现状及影响因素的中日比较研究, 大连外国语学院
男女共同参画白書 令和4年
中国第七次全国人口普查
- 田姫, (2017) 中国若年女性の就職活動経験における葛藤について: インタビュー調査結果を通して, 日中社会学研究 (25) 167 - 177
- 徐安琪, 張亮, (2009) 父亲参与: 和谐家庭建设中的上海城乡比较, 青年研究 (06) 41-49
- 松下東子, 青木和美, 何徳白樹, (2015) 「女性の活躍」推進がもたらすもの 日米中3カ国調査からの示唆 (前編), 知的資産創造8月号, 48-73
- 宮本絵美・長野恵子, (2010) 「大学生女子の親子関係に関する一考察 - 自我同一性の視点から -」西九州大学健康福祉学部紀要 41. 7-13
- 伊藤桂子, (2005) 青年期の家族機能認知に関する研究, 臨床教育心理学研究, 31 (1) 29-41
- 岩永亜季・藤原珠江, (2010) 父娘関係が娘の自尊感情と精神的自立に与える影響について, 長崎純心大学心理教育相談センター紀要 9, 75-83
- 桜庭露・伊藤菜穂子・横田正夫, (2007) 青年期における親子関係・心理的自立・抑うつとの関連, 日心第71回大会
- 野口康彦, 市川美樹, (2018) 女子大学生の精神的自立と父娘関係 - 父親の再評価という, 茨城大学人文社会科学部紀要人文コミュニケーション学論集 (3) 27-49
- 北村琴美・無藤隆, (2001) 成人の娘の心理的適応と母娘関係: 娘の結婚・出産というライフイベントに着目して, 発達心理学研究 12 (1) 46-57
- 田村和子・井上果子, (2005) 青年期における境界例心性と養育態度の関連について, 日本精神衛生学会誌 20. 73 - 87
- 西山佐代子, (2000) 進路選択. 久世敏雄・斎藤耕二監修 青年心理学辞典 23
- 鹿内啓子, (2013) 大学生の職業決定と親子関係との関連性についての面接調査, 北星学園大学文学部北星論集, 50, 1-12.
- 小野寺敦子, (1984) 娘からみた父親の魅力, 心理学研究, 55 (5) 289-295
- 周文靜, (2020) 浅析个人职业选择的影响因素. 农村经济与科技 (05) 241-243

謝辞／付記

本研究の遂行にあたり、調査にご協力いただきました両大学の先生方と学生の皆様に深謝致します。また質問紙調査に際して直接のご指導をいただいた京都女子大学の村井先生、坂井先生、福永先生に心より感謝申し上げます。